

# 価値の概念とその検証法

大学院博士課程

浜 口 恵 俊

価値 (values), 殊に文化的価値の実証的研究が, ここ10年ほどの間に盛んに行われるようになった。その代表的フィールドワークともいえるべき, Harvard 大学社会関係研究所によるアメリカ New Mexico 州での「五つの文化における価値の比較研究」<sup>〔註1〕</sup>の実り多い成果が, 既に21冊ものモノグラフとして公刊されている。だがそうした調査研究においても, 価値の概念は一義的に確定しているとは言い難いし, また検証のための方法論もまだ試験的段階を出ないように思われる。Goldschmidt & Edgerton の表現を借るなら, 「今ではたいていの人は, 研究を快く受入れる何物かだと価値を解してはいるが, その何物かが一体どんな物であるかについては何の合意にも達していないし, またその客観的分析のためのほんとうに確かな手段には少しも手が届いていない」(12: 26) といった現状だと言えよう。本稿の目的は, これまでの価値の概念規定及びその検証法における問題点を検討することによって, 価値の基礎理論の一つの展開を試みることにある。

## I 価値の概念

「ねうち」「効用」といった意味で使われる日常語としての価値は, 比較的一定した *connotation* を持っている。哲学的用法でも価値は, 物または事柄における欲求の充足性, もしくは人間の精神的努力の目標とされる客観的当為 (真・善・美), としてかなり一致した意味内容を指し示す。だが行動科学的術語としての価値の概念は必ずしもそうではない。心理学では, 態度・興味・動機・要求・情操性・誘意性・要求水準・道徳性・超自我, 等の諸概念が, 価値と同義に, またはその或る側面を指すものとして使用される (10: 64)。社会学, 文化人類学では, 規範・道徳体系・文化型・*themes*・*mores*, 等にはほぼ近似した概念とされることが多い。ところで知識社会学者の Adler は, 従来の価値規定には次の四種類のものがあると言う。その第一は, 永遠の理念の如く神意に宿る絶対的なもの (absolutes) としての価値。第二は, 物質的・非物質的客体に存するものと考えられた価値。それは客体が持つ個人欲求の充足能力であり, 欲求の何らかの対象である。第三は, 保持者たる個人またはその集合体の中に位置するものと見做される価値。Sorokin の規定する「意味」や Parsons における「行為選択の標準」, 或は Young, K. が言うところの「好みや優先の尺度となる理念と態度との結合体」, がそれである。第四は,

〔註1〕 1949～1955年 Ramah 地域 (McKinley 及び Valencia County の一部, 面積約1300平方軒) を中心としてフィールドワークが実施された。五つの文化とは, Navaho, Pueblo (Zuñi), Spanish-American, Mormon, Texan である。スタッフは, 最高責任者 Stouffer, 顧問 Parsons, Brew, Kluckhohn, C., 調整者 Roberts, Vogt, 及び22名の field-workers から成る (16: vii)。

個人の行為と等視される価値。この場合行為は、価値を経験的に認識しうる唯一の局面だと考えられる。行動の意味或は言語的・非言語的行動のセットとしての規範は、この種の価値の一つの表明である（2：272 f.）。Adler は、科学的価値研究の対象となりうるのは第二のもの以下の概念であるが、第二第三の価値も操作的検証の立場からは結局第四の概念に帰せられるとする（2：272, 276）。この点は改めて考えるとしても、Adler のこの類型化からも察しられるように、行動科学における価値の概念規定及びその用い方に、相当の差異と混乱があることは否定出来ない。尤も価値が選択の行動に係わる概念であることには間違はないのだが（17：402；26：12）、一体価値とは、要求充足の対象としての「望みのもの（desideratum）」なのか、または「望みのもの」に向けられる附価行動（valuing）なのか、或は種々の「望みのもの」乃至それを得る行為の諸選択肢の中からの選択（selection）なのか、それとも行為選択の基準としての「望ましさ」に関する個人もしくは文化の観念（conceptions of desirability in individuals or culture）なのか、更にはまたそうした「望ましさ」の諸観念の中からの採択過程としての評価（evaluation）なのか、この点必ずしも明確な区分がなされないまま、各研究者によって恣意的に用いられる傾向にあった。しかしながら今ここでそれらの規定の仕方のいずれが正当であるかを決定することは、我々の当面の課題ではない。一応これまでの社会学的文化人類学的慣用に従って、「望ましさ」に関する観念を、「望みのもの」・附価行動・選択及び評価の過程、等と区別する意味において、狭義的に価値と呼ぶことにしよう。そしてそれら全てを包括する広義の価値概念を設定し、Jessup に倣ってそれを価値複合（value-complex）と名付けることにする。<sup>〔註2〕</sup>従って価値複合は、1. 価値（「望ましさ」に関する個人もしくは文化の観念）、2. 「望みのもの」と附価行動、3. 選択及び評価の過程、によって構成される。以下これら価値複合の諸要素について、第一の「価値」に重点を置きながら、順次検討を加え、併せて価値の概念規定における問題点を探りたい。

## 1. 価値（values）

種々の「望みのもの」の中からより好み（preference）をするという行動は、社会集団毎に様式化され、一定の規則性を示す傾向がある。こうした規則性は一体何に起因するのか。この間に対して Catton は答える。「人々が物体、行為、生活様式を何らかの信頼性のある是認・否認のコンティニューム（continuum of approval-disapproval）の上に位置づけうる限りにおいては、人々の特定の『望みのもの』に対する反応は、文化的に習得せられた価値の函数であると思われる」（8：311）と。つまりその規則性は、各文化に特有な価値に規制されることに基づくとする。この場合価値とは、「時間的にずっと持続し、しかも人々が、いろいろな『望みのもの』に対する夫々違った強さの願望行為に序列を与える際に、その基準を提供するところの、おきて（code）乃至は標準（standard）」（8：311）を指している。かくて選択の基準としての

〔註2〕 Jessup の「価値複合」は、(1) 価値感情（value-feelings）、(2) 意志活動（volitional activity）、(3) 価値判断（value-judgment）、(4) 価値客体（value object）、を包含する（15：127）。

価値は、文化との密接な連関において、或は一種の文化事象として考察されうるものであり、従ってまた価値が文化人類学的に研究されるに到った必然的理由もここに見出される。

Kroeber が、「文化は価値を具体化する」(21:104)、或は逆に「価値は文化に帰属する」(21:105)、と言う場合、それは両者の密接な相互連関を簡潔に表現している。しかしながら、文化と価値とが全く同一のものではないということに注意しなければならない。Kluckhohn, C. も指摘するように、人は抽象度の高い文化を価値と混同しやすい。文化の成員が、自己と利害関係を一にする文化の諸側面に対して感情的に中立的ではありえないという意味で、その文化に附価することは妥当であろう。だが文化は、「望ましき」に関する観念のみならず、他に非規範的なもの、実体的なもの、技術的なものをも含むのである(17:421)。文化と価値との混同は、選択性(selectivity)に関しても起きる。つまり文化の基本特性の一つは選択性であり、従って文化的行動は、評価的行動と同じく、単に試行錯誤的反応ではなくて選択的行動なのだから。しかし価値は、単なる好みではなく、専ら「望ましき」の観念に基づいた選択的行動に係わる(17:421-422)。この点で Kluckhohn, C. が、一旦は価値を「行動の可能な諸選択肢間での選択に影響する、個人及び(或は)集団に特徴的な、経験に対する選択的志向」と定義したものの、それは価値ではなく実は文化の定義に相応しいと自己批判している(17:421)のも甚だもったもたと思われる。また価値が、文化型(cultural patterns)、文化統合体(cultural configurations)、或は Opler の themes 等と重複した部分を持つことも事実である。しかしそれらの諸概念が、専ら社会文化体系の構造的側面に係わり、且つ実在的命題(existential proposition)として表現されるのに対し、価値は、個人及び文化を含む汎人間現象に関与すると共に、制裁的或は規制の様式として前者とは区別される、とする Kluckhohn, C. の見解(17:422)は正当であろう。このように文化と価値とは弁別されねばならないが、しかし一方両者の間に存する相関性についての認識は、文化人類学の研究史にも反映され来た。例えば Siegel によれば、既に進化主義では保全と残存(security and survival)という価値がその前提となっており、また Boas 以下の文化相対主義においては価値の文化的相対性が主張され、更に機能主義にあっては、社会体系の bio-psychological survival における文化的適応様式として価値が指定される。次いで価値を真正面から取扱うようになった文化様式論の下では、顕わな或は行動的レベルと隠された或は潜在意識的レベルとの、両レベルでの価値が推測される(35:203-207)。いずれにせよ文化相対主義以後の文化人類学において、価値は観察された行動からの抽出体として扱われ、また規範的行動(normative behavior)という観点から、どのように行動すべきかということの表明として考察されて来たのである(35:209)。

さて「望ましき」に関する観念としての価値は、社会文化体系及び個人の二側面から眺めうるであろう。ただそのいずれの側からの接近においても価値は、「社会生活に対し予言可能性(predictability)という一つの要素を附加する」(17:400)という基本的機能を持つ。つまり『おきて』或は標準の焦点は、一つの全体的行動体系——個人的体系のそれであれ、社会文

化的体系のそれであれ——の統合ということに在る」(17:399)。従って両側面からの接近といっても、それは行動の統合性に対する視角の相違にすぎない。そこで先ず社会文化体系の側から眺めた価値について考えたい。この場合、価値は社会文化体系の一つの構造的要素として把握され、体系に対するその機能が問題となる。吉田氏も言うように、特に人間関係を規制する価値、即ち道徳的価値の社会生活に対する意義が重要であろう。それは規範的社会関係としての社会構造(social structure)の支柱乃至は成立基盤となる(46:10-12)。だがそれはどのようにしてか。体系の側から眺める価値は、Kroeber が述べるように超個人的(superpersonal)である。即ち「個人のどのような価値に関しても、彼が自分の内部でそして自分独りで作り出すものよりもはるかに多くのものが、外部から、つまり直接的或は間接的に彼の社会から、彼の内部に注入される」(21:129)のである。こうした外在性におけるいわゆる集合表象(représentation collective)としての価値は、当然個人に対し拘束性を示し、従って規範(norms)とほぼ等しい意味を持つ。それは体系にとっての逸脱行動に対する社会統制の有力な用具となり、体系自体の持続維持に貢献する。社会文化体系の側から見た価値の体系に対する機能とは、正しくこの意味においてである。例えば北米における一つの ethnic group である Hutterites の場合、永年に亘ってその絶対的な宗教的価値(消費生活の徹底的簡素化、自給自足の原則、私有財産の禁止、等)は、成員のそれからの逸脱を厳しく抑えて来た(11:333-338)。その結果、16世紀の初頭スイスに生れた彼等の社会文化体系は、20世紀の今日まで強固に維持され来たのである。一般に社会統制は、逸脱に対する制裁に裏付けられていることが多い。それゆえ当該社会文化体系の成員にとって体系の側からの価値つまり規範は、制裁と同一視されて受取られやすい。言い換えれば、「制裁と価値とは、各行為者の具体的な動機づけ体系の中で結合している」(17:432)のである。ところで Morris, R. は、単に個人的な或は分有された「望ましさ」についての観念である価値と、他人の行動に関する制裁を伴った規定である規範とを峻別しようとするが(27:610-611)、以上のように規範を価値の一形態と考える限りにおいては、この概念的区別は必ずしも必要だとは思われない。しかし彼の提出した規範分類のための基準は注目されてよい。その基準とは、(1)規範の分布(規範に関する知識の広がり程度・規範が受容される程度・規範の適用範囲)、(2)規範施行の様相(賞罰・制裁の厳格さ・施行機関・強要の程度・権威の源泉・被施行者の内在化の程度)、(3)規範の伝達(社会化過程の時期と方法・施行者による補強の程度)、(4)規範への同調(同調量・逸脱量・逸脱の種類)、である(27:611-612)。これらの分類諸基準は、所与の規範の諸特性を集中的に分析する際に有用な分析用具となりうるという意味においても重要性を持っている。

次に個人の側から眺めた場合の価値は、特定文化に所属する個人の選択的行動における基準として規定されよう。つまり Nadel の言う「一組の行為を支配する値打ち(worthwhileness)についての理念」(28:264)としてである。個人の属する社会文化体系が比較的良好に統合された均衡状態を維持する時には、そうした個人の価値は、前述の規範としての価値が単に各成員の

人格体系の中に内在化されたものにすぎないこともある。しかしその社会文化体系が文化触変 (acculturation) の如き変動状況に置かれた場合、変動しつつある個人の価値が、体系維持に向って順機能的に作用する規範と必ずしも一致するとは限らない。むしろ体系に対して逆機能を持つ場合も考えられるのであり、従ってまたそれは体系の革新或は変動への大きい要因となりうる潜在力を備えていると言っても差支えない。このことは、個人の側からの価値が、社会文化体系ではなく個人の動機づけ体系の中にその機能の場を持つことに基づいている。要するに、社会文化体系が静的均衡を持続する限りにおいては、体系の側からする価値と個人の側からする価値とは合同的 (congruent) であることが多いが、一方体系の変動期においては、両者の体系に対する機能が互に排反的になる、従って両者の非合同性が示される場合があると想定される。それゆえ体系の側からの価値と並んで、しかもそれとは別に個人の側からの価値を規定する必要がある。更に吉田氏が Firth の説に基づいて指摘するように、現実の社会関係たる社会組織 (social organization) における個人の選択と決定の基準としての価値が、規範的社会関係たる社会構造の変動要因となりうるとすれば (46 : 11-12), ここにもまた規範としての価値とは別に個人の側からの価値規定を必要とする理由が見出される。ところでこの立場からの価値は、無論文化的に規制された「望ましき」についての基準概念としての基本性格を失う訳ではないが、しかし個人の選択的行動という視角から眺める以上、Parsons らの行動の一般理論との関連において規定されるのはもとより当然の傾向であろう。こうした方向からの最も代表的な規定は、Kluckhohn, C. による、「価値とは、行為の利用可能な方式、手段、目的の選択 (selection) に影響するところの、望ましいもの (the desirable) に関する、顕示的もしくは隠示的な、また個人に特有な或は集団に特徴的な、観念 (conception) である」 (17 : 395), という定義である。いま Parsons らの言うところに従えば、文化 (シンボル) 体系は、個人行為者が価値志向 (value-orientation) において準拠すべきルール乃至標準のセットとしての、評価的シンボル体系を包含する (31 : 97, 258)。この評価的シンボル体系は価値志向標準〔体系〕とも呼ばれるが、その標準がここで Kluckhohn, C. が規定するところの価値概念に相当するものと考えられる。何故なら、Parsons が言うように、「文化の型として仕上げられた価値志向は、〔型にはまった組織を持っているために〕集合体の成員の共通の価値となる潜在的能力を有する」 (31 : 261)

〔註 3〕文化触変における価値の役割としては、ジャイロスコープの役割、フィルター的作用、レンズ的作用、等が指摘される。一般にこれらは社会文化体系に対して順機能を果すと考えられる。しかし Navaho 復員兵について示されるように、彼等の変容された価値が、その体系の有力な変動因として逆機能的に (復員兵個人に対しては順機能的に) 作用する場合がある (1)。こうした場合、体系の側からの価値と個人の側からの価値とは、決して合同的ではない。文化触変における価値の機能と変動については、京都大学教育学部修士論文『文化触変と価値』(昭和35年)において論じたので、詳しくはそれを参照願いたい。

〔註 4〕Kluckhohn, C. の定義が次の Parsons の定義と極めて類似していることから、両者の関連性が察しられる。即ち Parsons によれば、「或る状況において本来自由に選べる志向の諸選択肢の中からの選定に対して、基準或は標準として役立つところの、分有されたシンボル体系の一要素が、価値と呼ばれよう」 (30 : 12)。

からである。この価値志向標準は、志向の *cognitive-cathetic-evaluative distinction* に基づいて、また価値志向の認知的、鑑賞的、道徳の様式に対応しながら、認知的諸問題の解決方式のアウトラインを描く認知的標準、また *cathexis* 的諸問題の解決方式に関与する鑑賞的標準、並びに純粹に評価的な諸問題の解決方式を取扱う道徳的標準、の三つに分化する (31 : 259)。しかも一方 Kluckhohn, C. も、自己の定義にこの *cognitive-cathetic-evaluative distinction* を持込み、それに基づいて価値の三つの契機を説明する。即ち前記定義中の「観念」「望ましい」「選択」という語は、それぞれ価値の必須的三要素、つまり認知的(*cognitive*)、情緒的(*affective*)、能動的(*conative*) 各要素を表明するものだという (17 : 395)。そこで価値志向標準と価値との対応性を考慮するなら、価値の各要素の優勢度に応じて、前記の諸標準が区別されることになる。それはともかく、Kluckhohn, C. の価値概念が行動理論との何らかの構造的連関をもって規定されているということは、まぎれもなく否定しえない事実である。

Kluckhohn, C. の価値概念を更に敷衍して考えてみよう。価値の認知的要素は、先ず第一に操作的な見地において、即ち価値が個人の言動についての直接的な資料から推論されたもの或はそれからの抽出物であるという意味において、その存在が認められる。定義での「観念」という語は、価値が正しくそうした論理上の構成体 (*logical construct*) であるということを示すものである。従って「人は互に助け合うべきだ」という陳述も、厳密に言って価値そのものでなく、相互扶助という価値観念の言語的表明にすぎないことになる (17 : 395-396)。要するに通常隠定的であることの多い価値が顕示的な観念となるのは、行動の一貫性を説明しようとする観察者の側において、それが推論的な構成体と化した場合だと考えられる。ともかくかかる構成概念として価値を把握することが可能だということは、その認知的性格を立証することになる。次に価値が認知的要素を包含することは、それが「望ましいもの」に関する観念であるというその本質規定によっても示される。単なる「望まれたもの (*the desired*)」とは区別される「望ましいもの」とは、欲するのが適当だと行為者に感じられた或は思われたところのもの、または欲すべきだと行為者が信じているもの、を意味する (17 : 396)。それは確かに選択行為における認知的要素の存在を唆している。定義の「観念」という語は、価値が構成概念であることを指すと同時に、価値の持つこの理念性をも表明する。即ち「価値は行為遂行を定式化する理念(*ideas*)である」 (17 : 396)。第三に価値の認知的性格は次の諸事実からも知られよう。例えば或人がホウレン草を、それがビタミンや鉱物質を豊富に含有するという理由を述べた上で他の野菜よりも好んで食べたとすれば、そのより好みはその人の価値の表明となる (17 : 397)。そしてこの合理的選択には、明らかに認知的要素が存在すると考えるべきであろう。更に一般的に考えれば、人は常に自分の行為を、たとえそれが一貫性のない矛盾した或は不都合で間違っただけであっても、言語的に合理化しようとしがちなものだが、実は価値と是認・否認の理念との結びつきが、そうした *rational justification* を生むのである。このことと共に、価値が論議しうるものだという事実、或は「望ましいもの」というものが、即刻的な生理的緊張や特定の一時的状況からの

離脱によって初めて成立するものだという事実は、いずれも価値の認識的要素に基因する（17：396-397）。さて次に Kluckhohn, C. が、「願望（wish）と鑑定（appraisal）という両要素が価値の中にもつれあったまま結合している」（17：400）、と述べるように、価値には認識的及び情緒的要素が併存する。確かに「望みのもの」を欲しない限りは、行為の選択もその基準概念もありえない。価値は要求の脈絡の中で初めて現実化するものである。だがしかし、だからと言って価値と要求とが全く同一視されうるものでもない（17：428）。<sup>〔註5〕</sup>恐らく価値は cathexis の合理化されたものと言うのが適当であろう。或はまた、価値は衝動充足における許しうるコストの限度を、個人的もしくは社会文化的な行動体系の統合性を基準として、規定するものとも言えよう。換言するなら、価値は動機づけを水路づけるものである（17：399-400）。この意味で価値を、「即刻的な状況とは対比される『おきて』や標準によって決定されるような動機づけの局面」（17：416）と定義することも許されよう。以上要するに、「観念」と「望ましい」という語の結合によって、価値に内在する理性と感情との連合が確立されることになる（17：400）。しかしその際、認識的要素の情緒的要素に対する優位性は認めなければならない。何故なら価値は、要求の対象となる「望ましい」何物かに関与するとしても、あくまでそれに向う選択的志向を規制するところの「望ましき」についての観念なのだから。ところで更に Kluckhohn, C. が指摘するように、行為者が価値について考えまたそれに頼るのは、行為の選択肢となっている諸コースについて、そのどれを採るべきかに迷うような不確定な状況においてである。即ち或る選択の終局的な結果が即座には判らないか、或は科学的に立証されていない時、また一方では個人的動機づけの圧力が強いにも拘らず、他方ではその選択を許さない社会的制裁が強い、もしくは他種の実際の便宜が得られるような時、初めて作用する（17：395）。Kluckhohn, C. が価値の第三の必須要素として「選択」という能動的要素を挙げるのも、価値が上記のような行為の不確定性を解決する多少とも安定した方法を示唆するからである。勿論この選択は、認識的要素と結びついて行われるから、単なるより好みではなくて評価的選定である。つまり或る選択肢の決定は、正当だと感じられた、或は正当だと考えられた選択である（17：396）。従ってここでもまた、認識的要素の能動的要素に対する優位性が見られうる。ただここで注意を要することは、観察者の立場からすれば、行為の方式、手段、目的に関する諸選択肢からの選択が客観的に自由であると見做しうる場合にも、行為者自身にとっては必ずしもそうではないことがある、ということである。科学者としての観察者の目から眺めた一連の possibilities も、行為者本人にとっ

〔註5〕 価値を欲求的視角から見ようとする考え方は、既に遠く Hobbes の『リヴァイアサン』の中に現われている。彼は次のように言う。「しかし、なんにせよ、ある人の欲求意慾の対象たるものは、それはすなわち、かれがかれ自身としては善 Good とよぶものなのである。そしてかれの憎悪嫌悪の対象は悪 Evil であり、かれの軽視の対象はつまらぬ Vile 問題にならぬ Inconsiderable ものである」（14：98）。価値は確かに欲求から生じるといってもよいかもしれない。しかし Lee は、特定文化の基本的要求それ自身がその文化における価値の産物であると主張している（22：339）。結局のところ要求と価値とは、発生に関して相互にその母胎となりうる関係にあると考えるのが最も妥当なのではなかろうか。正に Kluckhohn, C. の言う通り、「価値は要求から生じると共に要求を作り出すものでもある」（17：428）。

てはその中の或るものが、或る文化的視角もしくは特定の個人的視点からは明白には判らないこともあろう。また或る状況下では諸選択肢間での自覚的な選択が可能であるかもしれないが、別の状況下では特定の行為が不可避なものと、または唯一の方途であるかのように思い込むことがあろう (17: 401-402)。従って価値研究者にとって大切なことは、行為者の実際の選択行動が、行為者にとってどの範囲の possibilities の中からの選定であるのか、またその選定がどんな状況下で行われるのか、という点についての慎重な考慮である。

以上の考察からすると、価値の認識的要素がその情動的・能動的要素に対し統制的機能を果たところに、行為の選択と決定の基準としての価値の存在理由が見出されることになる。またそれゆえにこそ価値が行動規制の一つの有力な要因となりうるのである。ところで行動規制の他の有力な要因として一般によく態度 (attitudes) が挙げられる。Linton の価値・態度体系 (value-attitude system) という概念が示すように (24: 72), それは価値と極めて類似した概念である。しかし価値は態度と必ずしも同一視されえない。Kluckhohn, C. が言うように、行動への readiness 的状態としての態度には、「望ましさ」との係わりが欠けている (17: 423)。だから価値を包括的態度の共通な目標と規定し、態度そのものとは区別をつける Newcomb の見解は (29: 127), 恐らく妥当であろう。尤も価値が、行動の方向即ち目標そのものではないことに留意されねばならないのだが。「価値は、目標が選ばれるための基準として、またその目標が状況の中で持つところの含みの意味として現われる」 (17: 429) のである。こうした態度との異同はさておくとしても、価値の行動規制性は、Kluckhohn, C. の定義における「行為の利用可能な方式、手段、目的の選択に影響する (云々)」といった語句にもはっきりと現われている。更に Williams の価値規定、即ち「価値とは行為を組織立てる方式である——つまり人間の行為を導くところの、意味深いしかも情動的に付与された様式原理 (pattern principle) である」 (45: 375) にも、或はまた Stein & Cloward の「価値が事実上人間の行動の方向を決定するものだということは、一般に承認されたところである」 (37: 263) といった叙述においても、このことは明白に示されている。この行為規制要因として把握された価値は、行為者の人格体系に内在し、且つ選択行為に先んじて存在するのだから、その検証は、現在の研究段階においては、具体的行為をもとにして了解する (verstehen) という手段に頼らざるを得ない (17: 396; 2: 275)。しかしながら Kroeber が鋭く指摘したように、「たとえ価値が常に文化的有機体即ち人の行動に影響を与えるものとしても、それは決して独占的に行動を制御するものではない」 (21: 138) とすれば、価値と行動との間のこの懸隔性のために、Adler の懸念通り、価値の行為からの感情移入的了解が、単に観察者自身の投入 (introjection) と化する危険性が全くないとは言いきれない。少なくとも行動観察に基づく論理上の構成体としての価値は、その普遍性に関して恣意的なものとなる傾向が大きいであろう。それゆえ Adler は、如何なる行動も、それは行為者の最も為したいことの表明だという前提の下に、行動と価値とを等視する (2: 276)。彼はこの等視によって初めて価値が経験科学的に実証されうると説くが、しかしこの考え方には

価値が選択的行動にのみ関与するということの認識が欠けている。緊急の事態における選択を伴わない反射的行動をも価値と見做すことは、決して許されることではない。この点はともかく、価値を行動規制要因としていわば機能的に規定することに、以上のような難点が見られるとすれば、今度はむしろ逆の方向から、つまり操作的に或は結果論的に規定する必要が生じて来る。こうした立場から Catton は Kluckhohn 定義を次のように修正する。即ち、「価値とは、シンボリックな『望みのもの』に対する一組の選択的な反応によって暗に示される、『望ましいもの』についての観念である」(8:312)。価値が「望ましいもの」に関する観念だとすれば、それは Morris, C. のいわゆる思念価値(*conceived values*)に相当すると Catton は考える(8:311-312)。そして Morris の言に従えば、思念価値は好ましいものについての観念(*conception of the preferable*)であって、選択的行動に用いられるシンボル及びシンボルへ向けられた選択的行動を通して研究されうるのである(26:11-12)。この Catton の修正定義は、シンボルへの選択的志向の結果から見出された、つまり操作的観点からの価値の実体規定である。従って価値の行動規制性は、むしろそうした操作的概念の一つの属性的機能として述べられることとなる。この点で Catton の定義は、Kluckhohn 定義に見られるような、行動を説明すべき概念の規定が、その概念の行動に対する機能それ自体によってなされるという、循環論法的誤りを救うものとして高く評価されよう。しかしながら、シンボルに関与する選択的行動と非シンボルに対する志向とを操作的に弁別する基準が明確でないし、それに Morris 自体においてすら、シンボルとは一体どういうものを指すのかが判然としない。しかもなお基本的には Kluckhohn 定義に依存する Catton 定義ではあるが、如何に行動理論の観点に立つとはいえ、そこには価値が個人的に或は集団的に特異性を持つということを指摘した語句が見当たらないために、何かもの足りない感じがしないでもない。本節の最初に述べたように、Catton は価値の集団的規則性、文化的規定性についての認知は十分であった筈なのだが、Catton の価値規定にもなお不十分な点があると言わざるを得ない。

個人の側から眺めた価値の概念について、主にその Parsons らの行動理論との関連性、或はその認識的要素の情緒的・能動的要素に対する優位性、更にはその機能的な規定の不適當性と操作的なその再規定の問題、などについて考察して来た。ここでもなお残されたそうした価値の基本特性について若干触れておこうと思う。その第一は価値のコスト決定性である。個人の選択行動において、一方の選択肢の採択は他の可能な諸選択肢の放棄、従ってそれらを犠牲にすることを意味する。それゆえどのような選択された行為も、「如何程かのものにつく (*cost something*)」と言われよう(45:376)。人間の持つ生活時間或はエネルギーは有限であるから、当然のこととして出来るだけ経済的にそうしたコストを下げようとする(17:402; 45:376)。その際作用する選択行為における価値の基準性というものは、実はこのコストの経済——つまりコストにおける最大限の軽減化を目指しつつ、適当なコストでの折合いを決めるということ——に他ならない。言い換えれば、その個人に許されうる選択のコストを決定するのである。この意味でのコス

トの量的指標として Belshaw は「時間」を挙げている（5：561-562）。価値のコスト決定性は更に別の方面でも見られる。即ち、既に触れたことではあるが、「価値は、或る表現的充足または道具的達成（expressional gratification or instrumental achievement）の許しうるコストの限界を、そうした行為が体系の他の諸部分及び全体としての体系に対して及ぼす影響を喚起せしめることによって規定する」（17：394）のである。こうした社会文化体系によって許容される個人行為の限界を決定する時に働く価値のコスト決定性は、殊に体系・個人間で葛藤を起しやすい行為の選択肢の選定に際して、個人の大切な準拠枠となろう。第二の基本特性は、価値の自明性（self-evidence）である。特定文化体系の成員にとって自分達の価値は、最良のものとして、或はごく自然なものとして受取られる（37：264）。いわゆる ethnocentrism の発生源もここに求められるに違いない。自然な感じの価値とは、それが当該社会・文化の成員にとって自明であるということの意味している。前田氏によれば「総じてある社会の等質的な成員が、一致行動の原理（Konformitätsprinzip）から、あるグループ規準に従って行動した場合、その行動はその社会の成員にとって自明なこととされる」（25：54）。ここで言う自明行動のグループ規準とは、その社会の価値だと解してもよからう。しかもその場合価値それ自体が既に成員にとって自明なものでなければならない。「自明性は『なぜか』という問に対して論証の必要を認めない」（25：54）のであるから、成員にとっては何故或る「望ましいもの」についての観念が価値として存在するのかを知らないし、またその正確な説明もなしえない。けれども彼にとっては、その観念が自覚された合理的根拠はないにしても、自分達の価値であるということだけは疑うべくもなく自明なのである。だからこそその自明な価値に頼り、それを行為選択の基準としようとする。価値の自明性とは、正しくこうした事実を指している。

以上において価値の概念を二つの視角から、即ち規範として社会文化体系の側から、また行動の選択基準として個人の側から、眺め検討して来た。そのいずれの部面において捉えようとも、おのおのの価値は決して孤立した存在たるに止まらない。本来諸価値は相互に関連した価値体系（value systems）を形成すると見做すのが妥当であろう。尤も価値体系と言え、文化統合の規定原理たる cultural configurations, cultural themes, cultural focus, leitmotiv, 等の諸概念を指すこともあるが、この場合は諸価値の統合体という意味においてである。価値体系はその統合のされ方によって類型化されよう。今 Parsons らの価値志向の統合の型に準拠して考えるなら、型としての統合（pattern integration）に基づく価値体系と、機能的統合（functional integration）に基づく価値体系とが区別される。前者は所与の社会文化体系における諸

〔註6〕

〔註6〕 Parsons らにおける型としての統合とは、所与の価値志向の型が、社会体系のいたるところで、諸行為者の個々の評価態度に一貫して具現されている程度を指す（31：278）。こうした一貫性のある具現が可能である為には、あらかじめ文化体系の側において、価値志向の諸型の明確で強固な hierarchy が存在しているということが前提となろう。一方機能的統合とは、価値と行為体系との統合を指し、多様な価値成分を適当な機会や関係に割り当てたり、価値の優先順序を定めることを意味する（31：278）。この統合は、行為者自身による自己の価値体系の編成を意味しよう。

価値の hierarchy 的統合体を意味する。その一例として、Navaho の価値体系を分析した Albert によって提示された hierarchy がある。(fig. 1 参照) Albert によれば、前提と価値

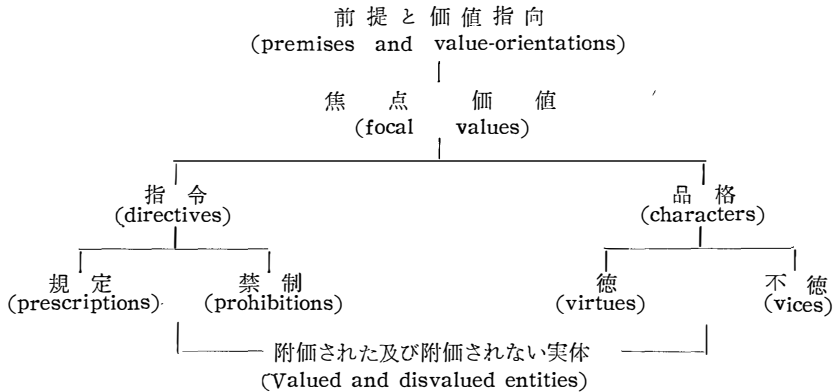


fig. 1. 価値体系の hierarchy (3 : 225より引用)

指向は最も一般的な「望ましいもの」に関する観念である。Navaho では例えば、宇宙の調和的な秩序、物事の正確な遂行によるそうした秩序の確保、*hózhóni* と称する一種の美的宗教的感覚、中庸性、実用性、相対的善悪観、等が挙げられる。焦点価値は、特定の諸価値の核であり、相互に関連した一つの matrix を形成する。家族、健康、財産、知識、生活の享楽、等が Navaho の焦点価値である。指令は、為すべきこと（規定）と為すべきでないこと（禁制）についての規則であり、タブー、義理、権利等をも含む。Navaho の場合、儀式を間違なく執り行うこと、危険な状況やわざわざからの逃避、家族主義的協和的人間関係、等が特徴的である。品格とは、是認・否認されるまたは賞罰を受ける人格特質に関連した価値（徳性）を指す。Navaho の徳ある品格は、知識があって言葉づかいが上品で愛想がよく、勤勉で責任感があり且つ魅力ある容貌を備えていることである。反対に「下品さ」と言えば、自制心のない怠惰で浪費性があり、怒りっぽくて残忍な人と見られるような不徳の品格を表わしている。こうした諸価値に包括的に従属する附属された或は附属されない諸実体は、最も一般性の低い価値とされる。Navaho では、衣服・車・羊等の物質的財産の所有、或は牧畜・儀式などにおける技能の所有、更に多産性、等が附属された実体として挙げられる (3 : 225-226, 232-242)。Albert による Navaho のこのような価値体系の hierarchy は、型としての統合に基づく価値体系の典型的なものである。しかしながら特定文化体系の成員が、行為の選択において、こうした科学的に構築された客観的存在たる価値体系 hierarchy の全体像を心の中に明確に描くということは、まずないと思われる。恐らくその成員は、自己の当面する選択状況に関連した種々の価値を、その人独自のやり方で、またその状況の特性に応じて、一つの相互連関的な体系にまとめることであろう。その体系は、前者のような固定的 hierarchy を形成することは少なく、むしろ各構成価値の中心性・末梢性が、機能的に或は状況相対的に規定されるような統合の型を示す。例えば A という価値は、P 状況においては他の諸価値 B, C, D, E……の中の機能的中心となるが、Q 状況においては他

の諸価値 G, H, I, ……と共に、機能的には単に周辺部に位置するだけの価値かも知れない。勿論回帰的状况下でそうした体系が人格に固定的に内在化することであろうし、また状況の如何を問わず文化の一般的 hierarchy に専ら準拠して、こうした価値体系を編成する人も居るかもしれない。だがいずれにせよ形成の原理が前者とは異なる価値体系の存在が考えられるのである。これが機能的統合に基づく価値体系に他ならない。前者の価値体系がいわば社会文化体系の側面において客観的存在として成立するのに対し、後者は個人行為者の側面における主観的価値体系だと言える。ところで Cornell Value Study Group は価値を asserted values と operating values とに分けるが (17:408)、価値体系のこうした類別化は、要するに価値を asserted なものとして見るか、または operating なものとして眺めるか、という観点の相違に依るものである。この場合両価値の関係については、operating values が文化社会体系の中に固定化された時、それは asserted values となると考えればよからう。今迄前者の価値体系に関しては、文化人類学的立場から比較的盛んに研究されて来た。しかし一方それと共に価値研究においては後者の意義も決して看過されてはならない。そしてその際「場」理論的接近が特に有用だと考えられる。

次に Albert の価値体系 hierarchy の頂点に位置していた価値指向 (value-orientations) の概念について、若干の考察を加えたい。この概念を提起した Kluckhohn, C. に従えば、一般的であり、組織化され、しかも明確に存在に関する判断 (existential judgment) を含む価値理念が、価値指向という名で呼ばれる (17:409)。価値は通常規範的命題 (normative proposition)、つまり「在るべきもの (what ought to be)」に関する命題として表現される。それは「現に在るもの (what is)」に関する実在的命題と対比される。しかもこの両者は互に密接な相互規定的関連を持つ。即ち一方では、規範的命題は実在するものについての集団の理念に基づいて成立する。例えば Navaho の価値を述べた、「自然秩序の可能な調和を維持、促進、回復すべきだ」という規範的命題は、「自然秩序は恐らく調和的なものだ」という彼等の実在的命題に基づいている。他方集団の宇宙観乃至実在的命題は、予め存する規範的命題によって規定されがちである (17:390-394,400)。こうした相互連関性のゆえに、価値は制度化によって行為における状況の部分と化する。<sup>[註7]</sup> 或はまた価値と存在に関する諸前提とは、個人や集団を特色づけるような、体験の全体像の中に殆んどもつれ合ったまま混在する。そこでこの両者から成る融合的概念を指して価値指向というのである (17:411)。Kluckhohn, C. は価値指向を、「自然についての、自然における人間の地位についての、人間関係についての、また人間・環境間関係並びに

〔註7〕「現に在るもの」についての信念が、「在るべきもの」の仮託された臆断 (disguised assumption) であることしばしばである (17:410)。一例を挙げれば、中年以上の親が「この頃の子供は親を親とも思っていない」などと愚痴をこぼすことも多いが、その際の考え方は、「子供は常に親孝行すべきものだ」という自分達の価値が、子の親に対する何らかの不服従や一寸した口ごたえにかこつけられて、臆断的に実在的命題として表現されたものにすぎない。一般的に見れば近頃の子供と雖も、決して頭から親を馬鹿にしたり、また親にむやみに反抗しようと思っている訳ではなからう。

人間相互間関係に係わる望ましいものと及び望ましくないものについての、しかも行動に影響を及ぼすところの、一般化され組織化された観念」(17: 411)と定義している。つまるところ価値指向は、生活状況の究極的意味についての特定文化集団の規定だと言えよう(17: 410)。またそれは最も一般的なレベルにおける特定文化の基本価値(basic values)だとも性格づけられよう。従って価値指向は、特定文化の諸価値を調べる場合、その中核的存在として第一に取上げられねばならない。ところでvalue-orientationという術語は、上記の如く定義された価値指向の概念として用いられる以外に、Parsonsらの行動理論においてもまた、動機づけ志向と並ぶ志向の様式を指すものとして使用されている。同一の術語を用いながら両者で意味が違うのは、orientationの方向の解し方における差異に由来しよう。それは、Parsonsらでは「主体→客体」という方向づけを、Kluckhohn, C.では逆に「客体→主体」という方向づけを意味している。従って前者は「志向」、後者は「指向」と訳し分ける必要がある。それゆえまたvalue-orientationについても、「価値志向」と「価値指向」との明確な識別がなされねばならない。だが我国においてこの点の認識が十分でなく、概念的区別についても訳語についても、遺憾ながら可成りの混同が見受けられる現状にある。

さてこの価値指向の概念は、最近Kluckhohn, F.によって更に批判的に発展せしめられた。彼女は次のように規定している。「価値指向とは、複合的ではあるがはっきりと様式化された(格づけて配列された)諸原理である。その諸原理は、評価的過程の分析的に識別しうる三つの要素——即ち認知的、情緒的、指方的要素——の事態処理の相互作用に由来するとともに、それが『汎人間的な諸問題』の解決に関与する際に、人間の行いや考えの止まることのない流れに序列と方向とを与えるものなのである」(19: 4, 341)。この概念規定においては、価値指向を単に規範的命題(価値)と実在規定概念との融合体として捉えるよりも、むしろ文化の基本価値として、しかも行動理論的に把握しようとする傾向が強く現われている。このことについて今少し考察を進めよう。Kluckhohn, F.は最初文化指向(cultural orientations)という概念でもって、文化型内の多様性を解明しようとしたのであるが、後に価値理論との接触によってその概念を価値指向と呼ぶようになった。そして全文化に共通して与えられる五つの問題と、それに対する各文化またはその成員の解答様式とから、価値指向の分類並びにその各文化毎の或は文化内部での可変性を明らかにするスキームを構成した。その際彼女は、人間性指向、人間・自然間関係指向、時間指向、活動性指向、人間関係指向、という価値指向の五類型を列举すると共に(19: 10-20)<sup>[註8]</sup>、それら各類型に亘る価値指向の三特性をも指摘している。即ち第一に、価値指向は、文化における実在的要素と規範的要素とを分離するというより、むしろ概念的に結合するものということ。第二に、価値指向は明白に指方性(directionality)の理念を意味すること。第三に、価値指向は、個人がそれを秩序づけの原理として意識的に知るかどうかということについては未確定のままだということ、即ちその認知度或は顕現性は必ずしも確定されないこと、の三つである(32: 63-64)。従ってその場合、「実在的要素と規範的要素とが切り離せないほどに相

互に関連した、行為のための指方的原理 (directional principle) (32:64) と価値指向が定義される。この定義では、依然 Kluckhohn, C. の価値指向概念との十分な近接が見られる。実在的・規範的要素の融合体として価値指向を構造的に規定する点において、そのことは明らかである。ところが上記定義の後半部分に在る価値指向が行為のための指方的原理であるということ、或はまた前記の第二の特性——指方性理念としての価値指向——が、初めに述べた、彼女の最も新しい価値指向概念並びにその解説において特に強調されるようになった (19:4-10)。そこでは既に構造的規定は影を潜め、過程重視の立場から、選択行為における指方性に焦点を合わせた、非常に行動理論的な基本価値の規定がなされているのである。それゆえ彼女の新しい価値指向概念は、Kluckhohn, C. のその批判的考察の上に成り立っていると言ってもよい。前述の通り Kluckhohn, C. の価値指向は、情緒的・認識的要素 (規範的要素 = values) と厳密に認識的な要素 (実在的要素 = orientations) との融合体として規定されていた (17:411)。尤も彼の場合価値の第三要素たる選択が全く無視された訳ではないが、必ずしもそれは前面には出ていない。Kluckhohn, F. はこの点が大いに不満なのであり、従ってまたその第三要素の意義を特に強く打出そうとする意図の下に、selection, choice, conation に代えて directiveness (指方的であること) という術語を採用する (19:6-7)。これが新定義において評価的過程の第三の要素 (指方的要素) として表現され、且つその意義が大きく問題化されている訳である。彼女によれば directiveness の意義とは次の二つである。第一に、Kluckhohn, C. の価値指向では、認識的及び情緒的要素が密接に相互に関連するということを、単に実在的・規範的命題の相互規制という点において述べるだけで、その相互関連の理由を明示しうるまでには到っていない。価値指向の構成要素である両者の関連は、実はこの指方的要素の統合力に基づいている。第二に、Kluckhohn, C. の価値指向をも含む従来の基本価値の諸概念は、その変異性 (variation) への考慮を欠くために、特定の時間空間における静的な構造的統合性 (structural integration) に関心を集中し、過程的指方性 (processual directionality) を看過する傾向があった。しかし

[註8] 共通した問題とは、(1)生得的な人間性の特質は何か? (人間性指向)、(2)人間の自然 (及び超自然) に対する関係は何か? (人間・自然関係指向)、(3)人間の生活の時間的焦点は何か? (時間指向)、(4)人間の活動の様相は何か? (活動性指向)、(5)人間の他の人間に対する関係の様相は何か? (人間関係指向)、の五つである (19:11; 32:65)。①は初期には、人間の生得的素質という表現が使われ、また④は附価された人格型は何か、という問であった (18:346)。これらの問題に対する解答の三様式は、引用したように表示される。なおこの表も、Kluckhohn, F. の各論文毎に多

| 指 向     | 仮定される variations の領域 |     |                              |     |                         |     |
|---------|----------------------|-----|------------------------------|-----|-------------------------|-----|
|         | 性 悪                  |     | 性善性悪性善性悪<br>不定 混在            |     | 性 善                     |     |
| 人間性     | 可 変                  | 不 変 | 可 変                          | 不 変 | 可 変                     | 不 変 |
| 人間・自然関係 | 自然への服従               |     | 自然との調和                       |     | 自然を征服                   |     |
| 時 間     | 過 去                  |     | 現 在                          |     | 未 来                     |     |
| 活 動 性   | 自然発露的存在<br>(Being)   |     | 発露的存在<br>(Being-in-Becoming) |     | 実 行<br>(Doing)          |     |
| 人間関係    | 直系性<br>(Lineality)   |     | 傍系性<br>(Collaterality)       |     | 個人主義<br>(Individualism) |     |

(19:12より引用)

少の差異があるが、本表は最も新しいものによった。このスキームに基づく日本文化の価値指向についての調査報告としては、既に文献(13)(39)(40)等が存在する。

動的見地から基本価値乃至価値体系の継続性に注目する時、それを方向づける指方的要素の嚮導力の意義が大きく浮び上るのである(19:8-9)。結局 Kluckhohn, C. の価値指向概念が、主に構造面に照明を当て、その選択的行動における意義の分析が十分でなかったのに対し、その批判の上に立つ Kluckhohn, F. の価値指向は、要するに「人間の行動に広く深く影響するところの、そして基本的な人間の諸問題に関する、一般化され組織化された原理」(19:341)であって、文化体系における核的価値をその変異性と指方過程に留意しつつ動的観点から把握すると共に、行為に対する指方性を強く主張する点において、極めて機能的な性格を帯びる。尤も定義の簡潔性に関して欠陥がない訳ではないが、この概念による「五つの文化における価値の比較研究」での多大の成果が客観的に証明するように(19:49 f.), その価値研究における意義は高く評価されてよいであろう。

## 2. 「望みのもの」と附価行動(desideratum and valuing)

前節でやや詳しく考察して来た「価値」は、文化的に規制される「望ましいもの」についての観念を意味しており、選択行為における志向対象としての「望みのもの」とは概念的に区別されねばならない。ところが、例えば Becker は価値を「何らかの要求の何らかの対象」(4:10)と規定し、また同様に Williams も「人々が関心を持った事物——即ち人々が欲したり、存在することを願ったり、或はそう成るように願ったり、必須であるかのように感じたり、大切にしたり、楽しんだりする、そうした事物」(45:375)と定義する。価値とは「誰かによって或る時望まれた或は選ばれた何物か、つまり『望みのもの』」(9:646)だとする Dodd の定義は、こうした立場を代表するものである。無論自己の価値理論のための操作概念としてそのように価値を規定することは自由であるが、上記の諸定義が意味する内容をここでは「望みのもの」と呼び、「望ましき」についての観念たる「価値」とは概念的に明確に区別しておきたい。そこで Catton に倣って「望みのもの」を次のように理解したい。即ち『望みのもの』とは、或る人が或る時望むところの何物かのことだとしよう。それは物質的なものであるかもしれないし、社会関係であるかもしれないし、また情報の一項目であるかもしれない。一般的に言えば、『願望の対象』という語で示される実体的な或は非実体的な何物かのことである」(8:310)。こうした「望みのもの」と価値との概念的区別は、既に Kluckhohn, C. が Dewey に示唆を得て the desired と the desirable との対比によって示したところのものである(17:394,395)。また Morris, C. によるところの、object(何か他の物よりも好まれうところのもの)と value(或種のものを他より好む傾向乃至性向)との弁別も、その現われとして理解される(26:10)。しかしながら区別さるべき両者の関連はどうなのか。普通「望みのもの」は文化項目(culture item)として表現されるが、その場合「望みのもの」の societal なレベルにおける定形化、固定化、一般化が行われたと見做しうる。だがそれは文化的価値の素材ではあっても、価値そのものではない。むしろ「望ましいもの」についての観念たる価値は、そうした文化項目の持つ効用、意義、機能についての理念だと考えるべきであろう。先に挙げた Albert の附価された実体も、厳密

な意味では価値そのものではなく、こうした文化項目だと言わねばならない。価値の実質的内容を構成するのは、それが社会生活でどのように役に立ちうるかということについての人々の考えなのである。だとすれば Morris, C. のいわゆる客体価値 (object values) の概念が、ここでいう価値に全くぴったりと当嵌る。それは望ましい客体の諸特質に強意の置かれた価値である (26 : 11-12)。行為者はこの客体価値を自己の思念価値として受取ることによって、換言すれば、客体の効用、機能等を行為選択基準とすることによって、選択を行う。こうした意味から、或る「望みのもの」が、特定の選択状況においてどういう理由によって行為者に選ばれたか、ということの中に価値が在るとも言えるだろう。Williams も、我々が価値をしばしば発見するのは、行為者が自己の行為について述べた説明や理由の中においてである、と書いている (45 : 379-380)。例えば或る日本人が羽田からアメリカに行くのに、ほぼ同一の所要時間、運賃、サービスの各社の中から日本航空の旅客機を選んだとしよう。その場合「望みのもの」としての日航機が彼の価値なのではない。もし彼が、単身異国に行く日本人としての自分にとって日航機は何んともなく気楽な気持ちで乗れる、という理由で選んだとすれば、その理由の中に潜んでいる日航機の持つ効用、意義が、彼の価値を構成しているのである。

さて「望みのもの」と価値との弁別は、「場」理論的立場からも説明される。「望みのもの」は、行動目標乃至は欲求対象として、力の場 (force field) を形成すると考えられる。しかし Lewin によれば、力の場は、諸力を誘導する可能性 (possibility of inducing forces) としての支配力の場 (power field) と区別されねばならない。ところが価値は、どの型の活動が或る状況下でプラスの行動価を持ち、どれがマイナスの行動価を持つかを決定する概念であって、行動目標 (力の場) の性格を持たない。従って価値は、力の場を誘導する支配力の場と同一の心理学的次元を持つ構成概念なのである (23 : 53-54)。それゆえ「望みのもの」と価値とは、力の場と支配力の場との差異として区別されることとなる。さてしかしこのように「望みのもの」を力の場として理解する限りにおいては、行為者の「望みのもの」への力学的関係が問題となる。これが附価行動である。Catton によれば附価行動は、「或る人の、種々の『望みのもの』を望む強度、或はそれを求める動機づけの量、を示すところの行為」(8 : 310) だと操作的見地から定義されている。既述のように Catton は、諸個人の選択的附価行動が社会文化的に様式化され、しかもその規則性が文化的価値の函数であることを明らかにしたが、更に進んで附価行動それ自体の構造の「場」理論的展開をも試みた。彼は附価行動に関する若干の仮説を提起している。第一に、「社会的に習得された『望ましいもの』についての観念 (価値) は、非シンボリックな『望みのもの』の中から人が選択を行う場合、それに影響を与える」(8 : 312)。この仮説は、実は Catton が Kluckhohn, C. の価値定義を修正した際省略した、価値の行為選択に対する機能の規定部分に当る。またそれは、Morris, C. のいわゆる実働価値 (operative values) に及ぼす思念価値の影響性を定式化したものである (8 : 312-313)。従ってここでは論理的な観点から「望みのもの」が非シンボリックなものに限定されているが、しかし実際の選択行為を考慮するな

ら、操作的に価値を規定する時に使われたのとはまた別のシンボリックなものへの選択をも含めるべきであり、この限定はそれほど意義があるとは思われない。なおこの仮説の系の一つとして、「非シンボリックな『望みのもの』の中から人が選択を行う場合、それに及ぼす（前記の如く規定された）価値の影響は、『望みのもの』の諸特性について社会的に習得された知識によって左右される」（8：313）が挙げられる。更にこれらと共に価値遠近法（value-perspective）に関する仮説が示された。即ち「価値が一定に保たれる時、願望行為（或は『動機づけ』）は、附価者（valuer）と『望みのもの』との間の（ $n$  次の心理的空間もしくは価値空間における）『距離』に逆比例して変化する」（8：314）。つまりこれは、或る物体の見かけ上の価値（引きつける力）が、その物体の附価者への接近度の函数であることを規定するものである（8：314）。但しここでいう価値空間の「距離」は如何なる単位で測定されるのかという疑問が残るのであるが。ともかく以上の三仮説から附価行動は、(1)社会的に習得された価値、(2)社会的に習得された、種々の「望みのもの」の諸特性についての定義、(3)附価者と「望みのもの」との間の、何らかの  $n$  次空間における距離、の函数であることが知られる（8：314）。だが附価行動は、附価者自身の欲求の力の場とも関連する。即ち所与の個人内部ではいくつかの力の場が相互に抑制し合う傾向があり、その結果一方の力が増大するにつれて他方の力は減少する（8：315）。このことから、「価値及び『望みのもの』・価値間の距離が一定に保たれる時、願望行動は、何らかの prepotency hierarchy<sup>〔註9〕</sup>における諸レベルの活性化に応じて変化する」（8：315）という仮説が引出される。Catton は更に、相互に従属関係もしくは合同関係にあるいくつかの「望みのもの」への附価者の反応は、互に独立したそれらへの反応より予想しやすいと述べると共に、社会文化的に規制される価値空間の諸次元のリストとして、(1)空間的距離、(2)社会的距離、(3)時間的な隔り、(4)確率、(5)一回起性（irrevocability）、(6)自由選択性、を挙げる。そして最後に、価値が一定に保たれる時、一組の「望みのもの」からのより好みの順序は、各個人或は集団が価値空間の全次元を常に十分識る訳には行かないから、一人一人或は集団毎に異なることになる」と主張する（8：315-317）。以上のような附価行動の「場」理論的解明は、非常に論理的であり且つ示唆に富むが、今のところ理論仮説に止まるのであって、どこまで実証されるかについては問題がある。技術的な面に関しても、例えば価値を一定に保つということが、フィールドワークにおいてどのようにして確保されるのか、依然解答が与えられないまま残っている。しかしながら、附価行動の構造を初めて理論的に究明したその意義は大きいと言わねばならない。

### 3. 選択及び評価の過程（processes of selection and evaluation）

主に前節で問題としたのは、価値と「望みのもの」との相違点と相互の関連性、及び附価者と

〔註9〕 prepotency hierarchy というのは、欲求が充足されない場合、知りたい欲求←自己実現欲求←尊重されたい欲求←愛の欲求←安全性の欲求←生理的欲求、という欲求系列（←はより上位であることを示す）において、低レベルの欲求ほど常に優位性を保つ、そうした hierarchy を指すところの Maslow, A. の概念である（8：315）。

「望みのもの」との力学的関係としての附価行動であった。附価行動は、Lewin 的に言えば力場における選択行動の構造を明らかにするものである。Catton はそれを、価値、「望みのもの」についての知識、価値空間における距離、附価者の要求 hierarchy の状況、等の函数として提示した。それらの諸変数の全ては、附価者が種々の「望みのもの」の中からそのいずれか一つを、或る状況下で最も願わしいものとして附価的に選択することに関連している。尤も Catton の附価行動理論では、附価と選択との厳密な意味での識別に欠け、従って両語を同義的に使っているようにも見える。しかし彼が主として問題としたのは、所与の価値或は一定に保たれた価値の下でという条件において、「望みのもの」の選択に関する力学的法則性の理論的解明であった。即ち彼の本来の意図は、選択行動そのものではなく、選択行動を通して表明される附価行動の究明にあったと考えられる。従って附価行動は、一般的な意味での選択行動それ自体ではなく、あくまで彼の定義通り、行為者が「望みのもの」へ或る力でもって引きつけられる過程、つまりそれへの cathection の強さが示されるような行為と見るべきであろう。その場合選択は、附価行動の一つの結果的な表現形態だと考えるのが妥当ではあるまいか。

さて附価行動と一応切り離すことが可能な行為の選択というものは、Kluckhohn, C. の表現に従えば、行為者の価値を含むものである。換言すれば、価値は個人が考えや行為の或る方向を他と較べて選定する時に作用する (17: 402)。要するに、「望みのもの」を入手または使用するための行為における利用可能な諸方式、諸手段、諸目的の中からそのいずれかを、「望ましいもの」についての概念たる価値を基準にして、或はそれに基づいて、選定する過程が選択である。尤も Kluckhohn, C. の指摘通り、行為の方式と手段と目的とを夫々相互にはっきりと見分けることは困難ではあるが (17: 403)。選択過程の構造については、前述の附価行動のそれと重複する部分が多いから改めては述べない。だがともかく行為の選択は、観察者の側から見て「客観的」に採択が自由な行為の諸方式、諸手段、諸目的を行為者が持つ、という前提の下でのみ正しく理解される (17: 402)。しかしながら先にも述べたように、行為者が特定の選択状況において、どの範囲の客観的に見て可能な諸選択肢の中から附価的選択を行うのか、またその選択状況が自由なる選択或は自覚的な択一を許すものかどうか、更には行為者自身が持つ選択に対する見通しの広さ狭さの程度はどのようなか、といった諸条件が、選択過程そのものの構造に大きく影響する点を見落してはならないであろう。

ところで行為選択基準としての価値は、既述の如く Lewin 的に言って支配力場を構成するが、選択状況に在る個人が、諸価値の中のいずれに依存して「望みのもの」乃至特定行為の選択を行うことになるのか、或は諸価値のいずれが依存されうる可能性を持つものか、という新たな問題が生じる。それは「望みのもの」の選定という行動選択それ自体の問題ではなくて、選択基準となる価値を行為者内部で選出するということに係わる過程である。その選出過程は、個人が行為の選択状況において、自分で構築した価値体系の中から基準として相応しい価値を、過去の体験に基づいて選び出す過程と言える。今それを、行為の選択肢の選定とは区別して、評価の過

程と呼ぶことにする。評価の過程を理論的に究明した von Mering によれば、それは「被験者やその他の人々の意図したそしてまた完遂した行為連続の中で、諸価値に関する価値判断を形成する問題」(43:83)だと規定される。つまり選択状況における価値の比重決定に係わる過程である。さて価値を人間の実存の重要な局面として把握する von Mering は、評価の過程を行為者個人の体験との関連において分析する。彼は次のように説明している。評価の過程のごく初めにおいては、即ち個人が何らかの意図する行為に適した価値について考えそしてそれを選択し始めた時には、文化の中に潜在的に貯蔵されている多くの価値が、少なくとも理論的には各個人の手の届く範囲内に在る。個人にとって客観的に与えられた或はまた選択することの自由なそうした諸価値は、possible values と名付けられる。そして或る一つの possible value は、附価者によって、その体験から知られうる多種多様な possible values の中から、確定しない自由な確率でもって選出されるものであり、少なくとも理論上は他のそれと同一の生起確率を持ち、またその附価者にとって問題的な或る生活状況における行為に付託される等しい機会を持つものと考えられる。評価の過程の端緒には、そうした価値は未だ行為の脈絡において確定した意味を持たない。しかし個人が、所与の状況に対し他よりも大きい適用性を持ち、しかも文化的にも是認され社会的にも重要な諸価値の中から、選出を行わねばならない問題に直面した時、即ち評価の過程が進行し始めた時、possible values は選択自由のままでは止りえず、その人にとって特定の生活状況の脈絡における行為に付託されやすい或種の possible values, 即ち probable values へと転化する。その転化は、附価者が現存する possible values に主観的なプラス・マイナスの重みづけをすることを意味する。その結果 possible values は、彼の特定の状況の下では最早等しい利用可能性もしくは生起確率を持たないという意味において、彼にとって問題的な (problematic) ものとなる。こうした転化は、彼の生物学的文化的環境と体験とを含む伝記的状况 (biographical situation) や、行為状況 (action situation) からの影響を受けつつ、或る probable values へ向けての累積的選択傾向を形成する過程である。かくて正負の加重を持った、換言すれば互に対重的な (counter-poised) そうした probable values は、個人内部で一時的には互に他に対して優越性を争いながら、疑似的に共存する。しかしプラスの probable values がマイナスのそれよりもずっと引続いて重みを持つ場合、前者が決定的価値 (definitive values) として行為に付託されることになり、ここに評価の過程は最終段階に達する。そして付託後の決定的価値は、心理学的に言えば、動機となり、また行動を方向づける安定した affect-laden codes として人格に内在化されるに至る (43:71-74,79-90)。von Mering は以上の評価の過程を fig. 2 のように図式化している。

von Mering の所説に従えば、所与の文化によって提示されしかも個人が選定をなしうるところの possible values の範囲は非常に大きく、その人自身の個人的生活体験を恐らく越えるものと考えられる。従ってその個人は自己の文化の全ての possible values を完全に知っているとは限らない。そこで所与の状況に適した価値を選出しなければならない問題に当面すれば、彼は専

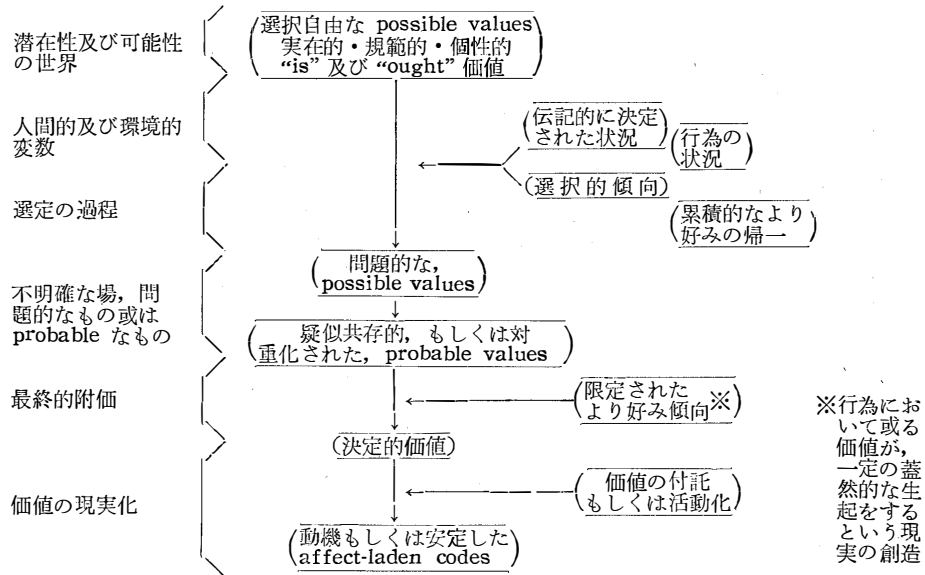


fig. 2. von Mering における評価の過程の図式 (43:88より引用)

ら自己に特有な possible values のまとまりの中から自覚的乃至は無自覚的な選出を行うことになる。その際当然のこととして、多くの違った諸価値が、その人にとってなおも選択自由なまま残される結果となるのである (43:68,80)。このような probable values 選出における体験の限定性は、probable values を基準とする「望みのもの」乃至行為選択肢の選択にも、そのまま反映するものと思われる。そのため先にも述べたように、観察者の目から見れば部分的なものにすぎない諸選択肢を、行為選択者が所与の状況に適用されうる全てであるかのように思い込んで、そのみを選択することになる場合が予想される訳である。さて評価の過程における以上のような体験的制約性の指摘は、確かに von Mering の価値理論を大きく特色づけてはいる。だがしかし価値研究において彼の理論が持つ意義は、あくまでも行為選択とは明確に区別される評価の過程を提起したことにあると考えられる。彼は次のように述べている。「(それゆえ)この理論においては、諸価値の直接的な影響或は威信の下において、利用可能な諸手段、諸方式、諸目的の間で、選択というものが生起するのではない。むしろ或種の probable values へと、ほかの probable values を部分的に或は全面的に排除しつつ向う、累積的選択傾向というものが起きるのである」(43:88-89)。von Mering のこうした分析は、行為選択の二重性を究明した点において、Kluckhohn, C. の選択についての考え方を一歩前進させたと言える。また文化における possible values と選択者個人における probable values との弁別及び両者の相関についての指摘は、Kluckhohn, C. の価値理論ではどちらかと言えば明晰さを欠いていた、個人の価値と社会文化体系の価値との関連性を、より鋭く深く分析したものと認められる。以上本節では、価値、「望みのもの」、附価行動らと区別さるべき、価値複合の要素たる選択及び評価

の過程について若干の考察を加えた。

現在価値の概念規定における最大の問題は、その色々な規定の仕方を如何に整理するかということであろう。本稿においては、主に選択行動との関連において、価値複合に含まれる諸要素を統合的に理解することを試みた。価値複合の構成を簡潔に表記すれば次のようになる。即ち、行為の選択を要する状況において個人（附価者）は、附価行動の対象となる「望みのもの」乃至はそれを得るための行為の諸選択肢を、評価の過程を経て確定された価値（文化的に規定される「望ましいもの」に関する観念）に依存して、或はそれを基準として、選択する。行動科学における価値の概念は、こうした価値複合において広く理解さるべきものであるが、その際「望ましいもの」についての観念たる狭義の「価値」が、当然その中核的地位を占めることになる。そしてそれは主に文化人類学の研究対象だと考えられる。さてこの価値の概念規定の問題と同様に、その検証法についても現在確かな方法論が樹立されている訳ではない。それゆえ次章ではその若干の問題点を検討したい。

## Ⅱ 価 値 の 検 証 法

ここでは主に「望ましいもの」についての観念たる狭義の「価値」の検証について考えることにする。既に述べたことながら改めて Goldschmidt & Edgerton の表現に従えば、「価値は社会文化現象だと見なされるが、しかし行為の交互的諸方式間での個人の選択ということによって表現せられる」（12：28）のである。従って文化人類学的価値記述においても、個人の選択行動についての操作的見地からの調査に基づいた資料が重要視されねばならない。Catton による価値の操作的定義のねらいも恐らくここに在ると思われる。

さて価値検証の行われる領域として Kluckhohn, C. は、(1) 是認的・否認的言動、(2) 或る行為目的の達成、或る行為方法への接近、或る行為様式の習得、等に示される努力、(3) 選択における一貫した指方性、を挙げる（17：404-405）。また Williams は、(1) 選択の Hierarchy、(2) 関心の方向、(3) 人々の善悪や「望ましき」に関する言明、(4) 隠された諸前提や信念、(5) 社会的制裁、に価値が発見されると説く（45：376-381）。これらの諸領域は要するに、「望ましいもの」に関する陳述か、或は「望ましいもの」についての隠示的な観念に基づいての、行為の可能な諸選択肢間における選択を表明するものであろう。しかしそれらが価値そのものでなく、行為における価値要素の言動的顕現にすぎないことに注意しなければならない（17：405）。価値自体はあくまでも構成概念である。ではこうした諸領域における検証方法として、何が最も適当なのか。Kluckhohn, C. の挙げる検証法の第一は、世論調査方式、公式的・非公式的インタビュー法、日常会話の記録、集団の口頭・文書伝承の分析、等による規範的陳述における規則性の確定である。それは言語化された価値の検証といってよい。第二は、行動傾向の綿密な観察、また選択状況において示される行為選択の入念な分析、による行為基準乃至は現実価値（real values）の検証である。その調査は、仮想的選択、投射法、questionnaire 法、簡単な実験、危機状況での

行動観察、等によって補足され、また洗練されるとする。集団価値に関しては、scape-goat 問題の如き、また全ての諸文化型の不変的な拠点や社会体系の機能的前提条件の周りに結晶するところの、回帰的な人間の諸状況に係わる価値を調べることに特に重要とされる (17: 405-408)。第二の検証法については、Williams は更に選択についての自己報告、金銭支出についての分析といった間接的立証、等を挙げている (45: 377)。これらの諸検証法の実例としては、例えば Scott によって価値乃至道徳的理想の測定に用いられた questionnaire 法及び面接法 (34), Morris, C. による「生き方 (ways of life)」についての questionnaire 法 (26), Spindler が価値投射法 (value-projective technique) と名付けている一種の文章完成法 (36), von Mering が「五つの文化における価値の比較研究」において工夫した話題制御討議法 (theme controlled discussion technique) による分析 (43), 或は前述の Kluckhohn, F. による価値指向 questionnaire 法 (19), 更には Vogt における Ramah Navaho 復員兵の生活史及び諸種の投射法による事例研究 (41), また Rapoport が使用した状況選択テスト (situational-choice test) 法 (33), 等々があり、それらは全て夫々のフィールドワークにおいて技術的に大きな進展を遂げたものである。今これらについて詳細な論評を加えるスペースを持たないが、ともかく Kluckhohn, C. の言う第二の検証法が、隠示的であることの多い価値の検証において中心的位置を占めるべきであろう。その場合は非具備しなければならない条件がある。第一は、その検証法が行為の選択状況 (choice situations) を含むものであること、第二は、特にテスト等による場合、被調査者の価値が偽られることなく有りの儘に引き出されるような何らかの工夫がなされていること、である。

第一の条件に関して言えば、先ず行動観察においては、観察者が行為者の選択状況の客観的特質を十分に把握しなければならない。即ち先述のように、或る選択が他の選択肢をも認知した上での自覚的なものなのかどうか、自由な選択を許す時間的余裕や環境的条件があるか否か、などに関する注意である。Navaho や日本人の場合のように相対的な性格の状況的道德性 (situational morality) が行為基準となりがちな文化においては、こうした点への配慮が特に肝要である。そのために実際の観察にあたっては、各事例について選択状況を精密にカードに記入すると共に、小型カメラや 8 ミリ映画撮影機、ポータブルテープレコーダーなどの活用によって、状況を出来るだけ客観的に記録分析する必要がある。questionnaire 法などによる場合も、調査者が入念に検討した仮想的選択状況を必ずその中に設定すべきであろう。前記の諸検証法の中でも、Kluckhohn, F. 及び Rapoport のもの以外は、この選択状況の設定ということの必要性についての認識が必ずしも十分でないように思われる。尤も Vogt は、その後 Homestead community (仮名) の調査においては選択状況について注意を払うようになり、その二つの形を指摘している。一つは危機状況 (crisis situation) であり、他は葛藤状況 (conflict situation) である (42: 9-11)。前者は集団価値の検証のための、<sup>(註10)</sup> 後者は個人的価値の検証のための選択状況として夫々重要であろう。更に後者の選択状況の発現形態として Goldschmidt & Edgerton

は、次の三つを挙げている。即ち、(1) **community** 内での分岐的な諸規範間の葛藤、(2) 文化の参加者が自己の **community** の本当の諸価値を、自分自らの不完全性のためにか、或は規範がその人に不十分にしか規定されていなかったためにか、ともかく適切に知りえない場合、(3) 値打ちのある行動と個人的な充足との間の選択、である (12: 27-28)。これらの諸形態は、調査に当って選択状況を考慮したり設定したりする場合、常に念頭に置かれねばならないものである。さて第二の条件を最も適切に充たす方法は、恐らく投射法的諸技術であろう。先に挙げた **Spindler** や **Vogt** の検証法がこれに該当する。しかしこれらと並ぶものとして、諺に対する個人の反応を調べる方法が非常に示唆的である。諺は、簡潔で鋭い表現形式を必要とするため、その具体的意味内容が極度に捨象された抽象的命題であるか、或は日常的なものではあるが著しく特殊な事例になぞらえられた象徴的命題であることが多い。それゆえ諺というものは、一般に漠然とした意味でもって受取られ、その解釈に関しても、各人の多様な体験に裏付けられ且つその人格に内在化している種々の価値を反映するような、多義性 (**multivocalness**) という基本性格を持っている。例えば「一寸の虫にも五分の魂」という諺の解釈について、京都大学人文科学研究所が高知県の一漁村で行った調査においては、伝統的解釈としての自律主義ととらず、生物愛護と解した者が22%あったと報告されている (20: 102)。筆者が曾って京都市内某高校一年生 (131名) 及びその保護者 (148名) について行った調査でも、同様にその多義性は立証された。生徒の場合、自律主義42.7%、生物愛護乃至博愛主義39.0%、弱小者に対する警戒的または慎重な態度16.0%、その他 1.5%、N. A. 0.7%となっており、保護者の場合もほぼ同じ傾向が見られる。この多義性を利用して、諺の解釈という過程の中に個人の価値を投射させることが出来よう。元来諺そのものが言語化された特定文化の価値とも見做されるが、それを、**Catton** が価値の概念を操作的に規定する際に用いようとしたシンボルに相当するものと考えれば、諺への投射的反應の調査が価値の検証において占める意義は大きいと言わねばならない。

価値は行為選択において初めて機能する概念であると共に、隠示的であるのが普通である。従ってその検証法において、選択状況の包含と投射的反應性という条件が要求されるのであるが、この二条件を適当に兼ね備えた一つの有力な方法が、**Goldschmidt** & **Edgerton** の絵画法 (**picture technique**) である。それは行為の選択肢的諸方式間での選択状況を描いた11枚のペン画のカードを被調査者に示し、その反応を記録分析する方法である。表面的にはそれは **TAT** に類似している。しかし **TAT** は、人格測定のための投射法の一つとして、その描かれた場面が被験者の自由な規定を許すよう適度に漠然としているのに対し、これは文化的に規定される行動型への反応によって価値を検証しようとするものであるから、その場面は文化的に特定で且つ具体的である。つまり被験者にとって現実性があり、また比較的有意義な選択状況が描かれている。

〔註10〕 **Vogt** は危機状況を、「或る文化における関係 (人間対人間, 人間対自然, 人間対宇宙) の体系を瓦解させる (或は瓦解させるおそれのある) ところの、しかもその社会集団が持続しうるとすれば何らかの即刻的な行為を必要とするような選択状況」 (42: 9) だと、また葛藤状況を「いくつかの価値見解 (**value-positions**) が葛藤するに到る選択状況」 (42: 10) だと、定義している。

Goldschmidt らは1959年夏、このテストを Menomini に対し試験的に実施した。二つの行為様式或は選択肢（土着的と文化触变的）が夫々描かれた各カードについて、被験者は「この場面で何が起りつつあるのか」、また「登場人物はどのように行動すべきか」が訊ねられ、それらへの各反応には、文化触変度コンティニューウム上の五段階に亘るスコアが与えられた。そこで各カード毎に、そうした選択的反応に関して、他の資料に基づいて既に分類されている土着志向者と文化触変者との各グループ間での反応分布の一様性についての  $\chi^2$  検定が行われ、同時に連合係数が算定された。 $.02$  乃至  $.001$  水準で有意差のあったのは、勤勉な生活対怠惰な生活、集団参加対独居、Catholicism 対土着宗教、全般的な社会的改善対消費生活のみにおける充足、を描いたカードであった（12：26-47）。この絵画法による価値検証は、確かに未だ試験的段階を出ないものではあるが、その改良によっては更に一層有用なものとなる可能性を十分に持っている。尤も Goldschmidt らの場合、カードに描かれた二つの行動様式について、「登場人物はどのように行動すべきか」と問うだけでは、被験者の価値よりもむしろその態度を尋ねる結果になるのではないか、という懸念が在る。前章で述べたように、価値と態度とが区別されねばならないとすれば、こうした質問の仕方は不適切不十分である。また本テストでは選択状況の表示が必ずしも完全でない。行為の二つの選択肢というよりも、単に二つの文化的行動様式が並列的に図示されたか、或は白人と Menomini とが対比的に描かれたかにすぎないカードが大部分を占める。唯一の例外は、手に札束を持った Menomini の一人の男が、酒場の入口とその隣の食料雑貨店の入口との丁度中間の処で、酒を飲もうか、それともやはり家から頼まれた買物をしようかと、思案して下を向いたまま佇立しているカードである。それは、家庭に対する責任と個人的快樂との葛藤を示すものだとする（12：42）。結果的にはこのカードに関して分布における有意差は検出されなかったのであるが、それが示すような選択状況の設定が、全てのカードについても行われねばならない。即ち選択状況に置かれた一人の人物が、行為の諸選択肢もしくは「望みのもの」を前にして、そのいずれかを將に選ぼうとしているような図示が必要である。その場合被験者が自己をその登場人物と同一視することによって投射が行われる——従って調査者は被験者に「この人があなただとすれば、どちらの選択肢を選びますか」と問うことになる——のだから、その同一視がうまく行くように、被験者の性別、年齢、職業、その他の個人的特性になるべく合致した登場人物を準備することが大切であろう。また TAT と違って、最初から被験者にその選択状況の意味なり、選択肢の対比的性質を明確に判らせるような工夫が必要であるが、Goldschmidt らのテストではこの点に関して徹底性を欠いている。「この場面で何が起りつつあるのか」という TAT 向きの質問はむしろ不要であろう。更に彼等のテストでは、選ばれた行為様式そのものが問題であった。しかし価値と「望みのもの」との差異と連関について述べた箇所指摘したように、価値が特定の行為或は「望みのもの」を選ぶその理由の中に在るとすれば、「如何なる理由からその特定の選択肢を選ぼうとしたのか」ということが、その際同時に被験者に訊ねられねばならない。その反応の統計的処理についても、選ばれた選択肢自体よりもむしろ選択理由に

基づいた分類と scoring が重視されるべきである。以上のように, Goldschmidt & Edgerton の絵画法による価値検証は種々改善の余地を残してはいるが, それは今のところ我々が或る文化の価値を把握する上で最も有望なものに思われる。

これまでのところでは特定文化における価値を検証する方法論について考察して来た。それはいわば価値の定性分析に相当しよう。次にその定量分析に当る方法論に関して簡単なスキームを述べてみたい。それは上記によって検証された特定の価値が, 以下に述べる諸種の特性項目の範疇乃至はコンティニューウムにおいて, 夫々どの位置を占めるかということに係わる。なおこの特性項目の構成については, Kluckhohn, C. の価値分類スキーム (17: 412-421) に多くの示唆を得た。

#### A. 範疇的特性項目

##### 1. 様態 (modality)

所与の価値の表現形態に関する特性項目である。例えば, 奨励的価値 (promotive values) 対禁止的価値 (inhibitive values), 象徴的価値 (symbolic values) 対具象的価値 (concrete values), 等の対として示されよう。所与の価値は各対のいずれか一方に属する。

##### 2. 内容 (content)

所与の価値の構成内容に関する特性項目である。ごく一般的には, 所与の価値は, 認識的内容 (正しさ), 表現的内容 (美しさ), 評価的内容 (善良さ), に従って範疇化されよう。また「望みのもの」を構成する文化複合乃至は文化項目の内容に対応した諸範疇が考えられる。例えば, 人間関係に関する価値, 食事作法に関する価値, 住居様式に関する価値, 衣服の色彩に関する価値, 図書における活字の種類と大きさに関する価値, 等々無数に存在する。所与の価値はこうした諸範疇のいずれかに該当する。

#### B. コンティニューウムの特性項目

##### 1. 広がり (extent)

所与の価値の保持者またはそれへの同調者の存在範囲に関する特性項目である。このコンティニューウムの両端には, 単独の個人によってのみ保持される個性的価値 (ideosyncratic values) と, 全人類に共通して持たれる汎人間価値 (pan-human values) とが存する。中間部には, 前者寄りに諸個人に分有される種々の個人的価値 (personal values), 及び後者寄りに特定集団成員全員によって保持される種々の集団価値 (group values) とが在る。

(fig. 3 参照)

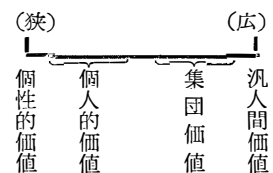


fig. 3. 「広がり」のコンティニューウム

##### 2. 強さ (intensity)

所与の価値が特定の選択状況において行為選択基準として行為者に採択される頻度, 或はその価値の支配力の場における大きさ, を示す特性項目である。このコンティニューウムの一端には, 支配力の場の大きさが最小であるか, または任意的にのみ採択される任意価値 (optional values)

がある。他端には、支配力の場の大きさが最大であるか、または採択頻度の最も高い至上価値 (categorical values) がある。中間部には、支配力の場の大きさ或は採択頻度に応じて諸種の優先価値 (preferential values) が存在する。(fig. 4参照) 強さを測定する標識としては、(1) 所与の価値の採択またはその採択拒否に加えられる社会統制乃至は制裁の程度、(2) 採択がもたらす報賞を入手しようとする欲求或は入手のための自発的行動の程度、(3) 一対比較法 (paired comparison method)

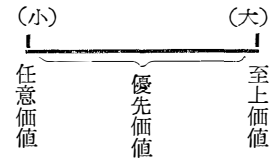


fig. 4. 「強さ」のコンティニューム

等によって構成される、諸価値の相対的強度に関する操作的尺度、が考えられる。なお一般に所与の価値の強さはその広がりと同調があると推測される。例えば、制裁度によって規定される強さと同調者の分布範囲の大きさとの間には、奨励的価値の採択拒否に関しては正の相関、禁止的価値の採択に関しては負の相関であろう。そして奨励的価値の採択拒否に関して、制裁強度と同調範囲が共に大きい場合に dominant values が、また両者が共に小さい場合に deviant values が、また両者が共に中庸の場合に variant values が、夫々設定される。禁止的価値の採択に関しては、制裁強度が小さく同調範囲が大きい場合に dominant values が、また制裁強度が大きく同調範囲が小さい場合に deviant values が、更に両者が中庸の場合に variant values が夫々設定される。(fig. 5 参照)

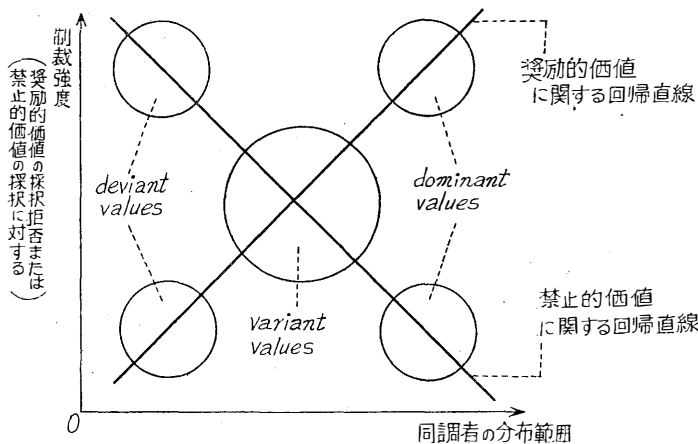


fig. 5. 制裁強度と同調者の分布範囲との相関図における、dominant, variant, deviant values の各領域

### 3. 顕現性 (salience)

所与の価値が、言語的に或は行動的に顕わ (overt) である、もしくは顕わになりうる程度、に関する特性項目である。Kluckhohn, C. の言ういわゆる言語化可能性 (verbalizability) に相当する(17:397)。このコンティニュームの一端には、回帰的行動様式または言語的表現から間接的にその存在を推測しうるだけの隠示的価値 (implicit values) があり、他端には既に行動様式または言語的表現として顕在化している顕示的価値 (explicit values) がある。その中間には、検証によって色々な程度に顕在化しうる諸種の可表示価値 (demonstrable values) が

存在する。(fig. 6 参照)

#### 4. 安定性 (stability)

所与の価値が、その世代的伝達過程或は他文化との接触において、また人格における内在化に関して、安定している或は変容されうる程度に係わる特性項目である。このコンティニューアムの一方の端には、他の諸価値を優先的に採択する傾向のために遂にはその存在性を失うに到る可廃価値 (eliminable values) が在り、他の端には、変容度の低い安定価値 (stable values) もしくは不変価値 (immutable values) が在る。また中間部には、種々の程度の変容を蒙る可変価値 (variable values) もしくは不安定価値 (unstable values) が存在する。(fig. 7 参照)

#### 5. 普遍性 (generality)

所与の価値が関与しうる選択状況乃至文化項目の領域的広さに係わる特性項目である。このコンティニューアムの一端には、特定の選択状況乃至文化項目にのみ関与する特定価値 (specific values) がある。或る文化において或る地位を占める人の役割規定に関与する価値、また諺の中で状況倫理的性格を強く持ったものなどもこれに属する。他端には、或る文化または全人類文化における殆んど全ての選択状況乃至文化項目に関与するような普遍価値 (universal values)、例えば相互性 (reciprocity) の尊重の如き価値がある。その中間には、特定の諸選択状況乃至諸文化項目に共通して関与するような種々の主題価値 (thematic values)、例えば Navaho における全ゆる事態での完結性 (closure) に対する怖れといった価値 (17: 413-414) が存在する。(fig. 8 参照)

#### 6. 関連性 (relatedness)

所与の価値が他の諸価値と関連する様式並びに程度に関する特性項目である。この場合、統合性という方向因子に関して、調和的関連と不調和的関連とが区別される。そのコンティニューアムの中央には、特定の状況において他の諸価値と殆んど関連性を持たない孤立価値 (isolated values) が在る。統合性の大きい方の端には、特定の状況において他の諸価値と強固に結合しやすい組織的価値 (systematic values) が、またそれと孤立価値との間には諸種の調和価値 (harmonious values) が存在する。統合性の小さい端には、特定の状況において他の諸価値と葛藤しがちな葛藤的価値 (conflicting values) が、またそれと孤立価値の間には諸種の不調和価値 (inharmonious values) が存在する。

(fig. 9 参照)

所与の価値は、以上の諸特性項目コンティニューアム上のどこかに夫々位置づけられることに

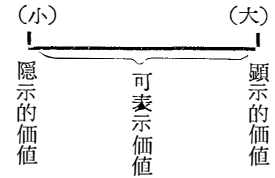


fig. 6. 「顕現性」のコンティニューアム

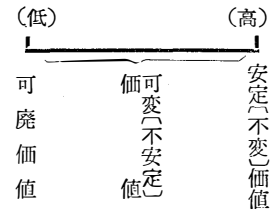


fig. 7. 「安定性」のコンティニューアム

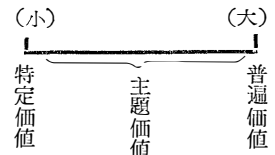


fig. 8. 「普遍性」のコンティニューアム

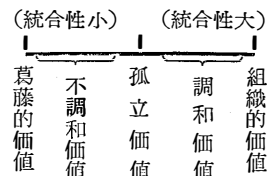


fig. 9. 「関連性」のコンティニューアム

なる。さてここで「強さ」の測定標識の(3)として挙げた操作的尺度について多少の補足をしておきたい。こうした尺度を研究した一人として Thurstone の名が挙げられるが、彼は個人の価値は本質的に主観的なものであるから、物理的測定ではなく主観的計測法 (subjective metric) によって測定されねばならないと言う。それは二つの価値の比較判断による方法、即ち一対比較法を意味している。そこで或る価値について数多く他との比較判断を繰返す時、その価値は subjective continuum 上に、或る平均値と弁別の散布度 (discriminal dispersion) を伴ったガウス分布を投影するものと考えられる。つまりその価値は、尺度値と呼ばれる平均値と、弁別過程の散らばりとしての標準偏差との二つの parameters によって、subjective continuum 上に規定されることになる。その結果任意に或る価値の平均値を原点にとり、また任意にその標準偏差を尺度単位とする際、同様にして測定された他の価値がその continuum 上に位置づけられることになる (38: 182-184)。かくて Thurstone は、こうして作成された尺度において価値が測定されると説くと共に、更にその尺度の合理的な原点の決め方をも理論的に追究している (38: 195-210)。Thurstone のこの価値測定尺度は、要するに価値の相対的な強さを測定するための操作的尺度だと考えられる。しかしその際、質的に等しくない諸価値の比較判断乃至は同一単位での測定が、果して可能なかどうか、という疑問が生じよう。成程それは一応尤もな疑問ではあるが、しかし人間の価値弁別能力は可成り高いと考えられ、そうした測定も十分可能だと思われる。それは Catton の次のような立証からも察しられる。即ち Catton は、もし価値間の質的非類似性が「同一単位での測定の可能性 (commensurability)」を妨げるとすれば、各価値相互の対における比較判断の反応がランダムなものとなり、他方妨げないならば、反応間に hierarchy pattern が期待されるという仮説を立て、諸種の実験的方法によってその commensurability を立証しようとした。例えば六つの抽象的価値 (人間の生活それ自体、人間の創造的業績、他人との協同、神の崇拜、人間の道徳性の発達、人間の知的活動の発達) の 15 対に関して、一対比較法を Seattle のプロテスタント牧師に実施したところ、その選択の hierarchy 指数についての臨界比法による検定の結果から、諸価値間での弁別性乃至その commensurability は十分認められたのである (6: 49-55; 7: 357-359)。

(註11)

[註11] Catton は、完全回答票28について、その hierarchy 指数を、Landauの公式、即ち、

$$h = \frac{12}{n^3 - n} \sum_{j=1}^n V_j - \left( \frac{n-1}{2} \right)^2 \quad (\text{但し、} n: \text{項目数, } V_j: j \text{ 番目項目の被選択数})$$

に従って計算し、測定サンプルの  $h$  平均値 .989 を得た。一方帰無仮説であるランダムな選択における理論的平均値は .429、また測定サンプル平均値の標準誤差は .0418 であった。この場合、測定サンプル平均値と理論的平均値との差が前者の標準誤差の13倍以上であるから、測定サンプル平均値ほど大きい反応をランダムに得るチャンスは極めて小さい。従って帰無仮説は棄却され、牧師達は異なる相対的値打ちの項目 (諸価値) を十分弁別しえた、と Catton は結論している (6: 52-54)。尤もこ

こで両者の平均値の差がその標準誤差の13倍以上だというのは、その臨界比、 $t = \frac{.989 - .429}{.0418} = 13.4$  のことを意味する。そこで念のためその  $t$  検定を試みるなら、 $t$  分布表において、 $d. f. = 27$ 、危険率 .01 で  $t = 2.77$  となり、従って帰無仮説は危険率 .01 でやはり十分棄却されうることが判る。

本章においては、先ず価値検証のための必要条件として選択状況性と投射的反応性を指摘し、既存の諸検証法の中では、その二条件を備えた Goldschmidt & Edgerton の絵画法が最も有望であることを明らかにした。次いで検証された所与の価値についての一つの定量的スキームを示した。しかしそれらは、単に価値検証法における問題の在り場所乃至はその一つの研究方向を示唆したに止まる。今後実際の調査を通じて、そのより精密な理論的技術的開発を図らねばならない。

Kluckhohn, C. の指摘を俟つまでもなく、人間生活はそれが社会生活であるがゆえに正しく道徳生活なのである。この場合道徳とは、行動に関する社会的に一致した価値のことを指している (17:388)。道徳についてのこうした考え方は、渡部氏では更に一步進められ、社会における個人の価値の機能局面として道徳が理解される。その主張に従えば、道徳は社会関係において何らかの価値の実現を目指す人間の主体的な生き方(行為)の問題である。実現さるべき価値とは、一方では社会の存続のための規範(道)、他方では個人の自己実現のための主体的な原理(徳)を意味する。かくて道徳は、社会の存続と個人の実現という本来矛盾的な二つの契機を、価値によって統合せしめようとする機能だと見做される、と言う (44:1)。価値をこのように社会生活の支柱たる道徳との密接な連関において把握する限り、価値研究の人間生活に対して持つ意義は極めて大きいものがある。

さて最初に述べたように、価値の実証的研究は、近年行動科学、殊に文化人類学において盛んに行われるに到った。しかしその概念規定及び方法論についての基礎理論的検討を抜きにして調査にのみ熱中することは、単なる民族誌的記述を残すにすぎない結果となるに違いない。こうした危惧に基づいて是非とも必要な基礎理論的検討を意図した本稿ではあったが、必ずしも所期の目的が達せられたとは言えない。その補完については、識者の御批判を得て、他の基礎理論として残された、価値の人格への内在化、文化変動と価値変動との関連性、等の諸問題の究明と共に、更に後日を期したいと思う。

## 参 考 文 献

1. Adair, J. & Vogt, E., "Navaho and Zuni Veterans: A Study of Contrasting Modes of Culture Change," *American Anthropologist*, Vol. 51, No. 4, 1949, pp. 547-561.
2. Adler, F., "The Value Concept in Sociology," *American Journal of Sociology*, Vol. LXII, No. 3, 1956, pp. 272-279.
3. Albert, E., "The Classification of Values: A Method and Illustration," *American Anthropologist*, Vol. 58, No. 2, 1956, pp. 221-248.
4. Becker, H., *Through Values to Social Interpretation*, 1950.
5. Belshaw, C., "The Identification of Values in Anthropology," *American Journal of Sociology*, Vol. LXII, No. 6, 1959, pp. 555-562.

6. Catton, W. Jr., "Exploring Techniques for Measuring Human Values," *American Sociological Review*, Vol. 19, No. 1, 1954, pp. 49-55.
7. Catton, W. Jr., "A Retest of the Measurability of Certain Human Values," *American Sociological Review*, Vol. 21, No. 3, 1956, pp. 357-359.
8. Catton, W. Jr., "A Theory of Value," *American Sociological Review*, Vol. 24, No. 3, 1959, pp. 310-317.
9. Dodd, S., "On Classifying Human Values: A Step in the Prediction of Human Valuing," *American Sociological Review*, Vol. 16, No. 5, 1951, pp. 645-653.
10. Dukes, W., "Psychological Studies of Values," *Psychological Bulletin*, Jan., 1955. (長島貞夫 訳, 「価値の心理学的研究」, アメリカーナ, Vol. 2. No. 9, 1956, pp. 62-85.)
11. Eaton, J., "Controlled Acculturation: A Survival Technique of the Hutterites," *American Sociological Review*, Vol. 17, No. 3, 1952, pp. 331-340.
12. Goldschmidt, W. & Edgerton, R., "A Picture Technique for the Study of Values," *American Anthropologist*, Vol. 63, No. 1, 1961, pp. 26-47.
13. 原 喜美, 「日本人の価値指向に関する研究(-)」, I. C. U. 教育研究, 国際基督教大学教育研究所, 1957, pp. 163-200.
14. Hobbes, T., *Leviathan*, 1651. (水田洋 訳, 「リヴァイアサン(-)」, 岩波文庫, 1959.)
15. Jessup, B., "On Value," in Lepley, R., ed., *Value: A Cooperative Inquiry*, 1949, pp. 125-146.
16. Kluckhohn, C., "A Comparative Study of Values in Five Cultures," in Vogt, E., *Navaho Veterans, Papers of the Peabody Museum of Harvard University*, Vol. XLI, No. 1, 1951, pp. vii-ix.
17. Kluckhohn, C. et al., "Values and Value-orientations in the Theory of Action," in Parsons, T. & Shils, E. eds., *Toward a General Theory of Action*, 1951, pp. 388-433.
18. Kluckhohn, F., "Dominant and Variant Value Orientations," in Kluckhohn, C., Murray, H. and Schneider, D. eds., *Personality in Nature, Society, and Culture*, 1955, pp. 342-358.
19. Kluckhohn, F. & Strondtbeck, F., *Variations in Value Orientations*, 1961.
20. 河野健二 編, 「漁村の経済構造と生活意識——高知県土佐市宇佐の調査——」, 京都大学人文科学研究所 調査報告, Vol. 17, 1959, esp. pp. 97-103.
21. Kroeber, A., *The Nature of Culture*, 1951.
22. Lee, D., "Are Basic Needs Ultimate?" in Kluckhohn, C., Murray, H. and Schneider, D. eds., *Personality in Nature, Society, and Culture*, 1955, pp. 335-341.
23. Lewin, K., *Field Theory in Social Science*, 1951. (猪股佐登留 訳, 「社会科学における場の理論」, 1956.)
24. Linton, R., *The Cultural Background of Personality*, 1945, (1949 ed.)
25. 前田嘉明, 「現代の性——その社会人間学的素描——」, 小松撰郎 編, 今日の哲学 IV, 「人間論」, 1960, pp. 47-76.
26. Morris, C., *Varieties of Human Values*, 1956.
27. Morris, R., "A Typology of Norms," *American Sociological Review*, Vol. 21, No. 5, 1956, pp. 610-613.
28. Nadel, S. F., *Foundations of Social Anthropology*, 1951.

京都大学教育学部紀要Ⅷ

29. Newcomb, T., *Social Psychology*, 1950, (森 東吾, 万成 博 訳, 「社会心理学」1956.)
30. Parsons, T., *The Social System*, 1951.
31. Parsons, T. & Shils, E. eds., *Toward a General Theory of Action*, 1952. (永井道雄, 作田啓一, 橋本 真 訳, 「行為の総合理論をめざして」, 1960.)
32. Pelzel, J. & Kluckhohn, F., "The Theory of Variation in Values Applied to Aspects of Japanese Social Structure," *Bulletin of the Research Institute of Comparative Education and Culture, Kyushu University*, No. 1, (English ed.), 1957, pp. 62-76.
33. Rapoport, R., "Changing Navaho Religious Values : A Study of Christian Mission to the Rimrock Navahos," *Papers of the Peabody Museum of Harvard University*, Vol. XLI, No. 2, 1954.
34. Scott, W., "Empirical Assessment of Values and Ideologies," *American Sociological Review*, Vol. 24, No. 3, 1959. pp. 299-310. (三沢謙一 訳, 「価値およびイデオロギーの経験的測定」, アメリカーナ, Vol. 7, No. 6, 1961, pp. 1-18.)
35. Siegel, B., "Currents of Anthropological Theory and Value Concepts," *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 4, No. 2, 1948, pp. 199-210.
36. Spindler, G., "Education in a Transforming American Culture," *Harvard Educational Review*, Vol. XXV, No. 3, 1955, pp. 145-156, (福鎌達夫 訳, 「アメリカ文化変貌期の教育」, アメリカーナ, Vol. 2, No. 6, 1956, pp. 48-62.)
37. Stein, H. & Cloward, R. eds., *Social Perspectives on Behavior*, 1958.
38. Thurstone, L., *The Mesurement of Values*, 1959.
39. 統計数理研究所「国民性調査委員会」, 日本人の国民性, 1961, *passim*.
40. 牛島義友, 西欧と日本の人間形成, 1961, *esp.* pp. 273-286.
41. Vogt, E., "Navaho Veterans : A Study of Changing Values," *Papers of the Peabody Museum of Harvard University*, Vol. XLI. No. 1, 1951.
42. Vogt, E., *Modern Homesteaders*, 1955.
43. von Mering, O., *A Grammar of Human Values*, 1961.
44. 渡部正一, 日本近世道徳思想史, 1961.
45. Williams, R., *American Society : A Sociological Interpretation*, 1951.
46. 吉田禎吾, 「文化人類学における価値研究の問題点——研究ノート——」, 民族学研究, Vol. 22, No. 3-4, 1959, pp. 8-18.